

慶應三丁卯年十一月

同年戊辰年二月

## 御用留

柳澤五郎右衛門

豊田家文書

(解題) 柳澤五郎右衛門(藪田隼人)は当時家老職にあり、後の東北出兵にあたっても指揮官を務めている重要人物なので、その御用記録が完全な形で残されていれば、極めて重要な内容を含む筈である。しかしながら、この文書も極めて残念なことに、最も重要な慶應三年十二月初から翌四年正月末迄の記録が完全に欠落している(表題にもこの期間が省かれていることを明記している)。とはいえ端々にこの時期の藩状況を窺わせる記事があり「家記」と対比することが出来るので敢えてここに収録した。

特に十一月十五日に保申から階層身分別に全藩士を集め

「方今、將軍家一大事之御場合ニ付、御直筆を以、被仰出之」

との告諭を示している記事。さらに保申はそれに対する家中の反応に危機感を感じたものか、同廿五日に御所傳奏及び幕府老中に帰郡を願出て、この許可が出るや同二十八日早朝に京発、同日深夜四半時(十一時頃)という強行程で帰城していること(残念ながら告諭書及び帰城後の状況は一切記されていない)等が記されている。さらに前掲家記では紛失と回答している御所・幕府への帰郡伺書が残されており、両者への伺書に微妙な差異がある部分や、このような情勢緊迫化でも淡々と春日御祭りの準備がなされ、一方で二月以降多くの病氣引退(強制隠居であろうか)がなされていることなど興味深い内容を含んでいる。

以上

慶應三丁卯年十一月

同年 戊辰年二月

御用留

柳澤五郎右衛門

(注) 当時家老の柳澤五郎右衛門は、通名は藪田隼人といい、役儀により賜姓を名乗った。

② 家老千五百五十石慶応元丑十月二十八日、辰十八。安政三(1856)辰年十八歳であれば慶応三(1867)卯年には二十九歳になる。東北遠征隊の指揮官。

本文書はまさに維新の最中の慶応三年十一月から翌年二月にかけての家老御用留であり、この期の郡山藩の動向を知るための最高史料たるべきものであるが、残念ながら表題の通り十二月から翌一月の最重要期間が欠落している。しかも表題自体がこの欠落を記していることから、一旦記されたものが一部抜き取られたのではなく、維新後に全てが書き換えられた可能性が察せられる。因みに執筆者は豊田家文書「廻状留(安政六年から文久二年頃)」と筆跡が類似しており、同一人の可能性が濃い。

十一月朔日 晴

一 式日御礼例之通畢<sup>而</sup>

殿様益御機嫌克

御鍵奉行以上

御旅行被遊、恐悦申上之

(注) 保申は、公儀及び公家方よりの緊急上洛命令により。十月廿二日江戸発、十一月四日京着の途上にあった。

二日 曇

一 竜華山<sup>江</sup>

松平但見

御名代

(注) 竜華山永慶寺は、国元における藩主菩提寺であり、また松平但見は立藩以来の付家老的存在で、しばしば名代参詣を行っている。① 御家老千二百石役料二百俵辰四十一

於御用部屋

牧野善之助

御警衛御用<sup>二</sup>付

石田八十助

安治川口<sup>江</sup>出張

被仰付之

但支度次第可致出立候

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通

(注) 何故か②に該当者が見出せないが、或いは次の人物か。

③ 304 御馬廻席四十石役料十五俵、御買物方兼役 牧野多吉 辰三十三

④ 305 御馬廻席四十石役料二十俵 御徒目付組頭兼役 石田助八 辰三十九

安治川警衛は幕末維新にかけて郡山藩に課された重要軍務で、家譜附録に次の記事があり、これにより郡山藩は苛酷な長州戦争出兵を免れている。その後鳥羽伏見敗戦での慶喜逃亡時に、七日付けで一旦幕府からは「諸警衛持場免除」されるが、十日には新政府参謀から「安治川口番兵可差出旨」の命があり、実際には継続警衛に当たったものである。

「同廿八日、諏訪因幡守忠誠召家臣以書面達曰、可警衛安治川口並兵庫表。由方今諸藩有令征討防長之命、公務繁多、故強被命保申所警衛。及征討畢宜嚴重奉其事。由是、免油小路警衛之事給也。

十二月十二日、御城代松平伊豆守信古召家臣曰、今次、保申所警衛部局嚴重船隊修斉。為一段之事、尔後、愈当厳焉。」

御警衛御用無滞

相勤、昨夕帰着ニ付

締向之儀申達之

右立會例之通

斎藤大四郎

④ 157御目付六十石 辰三十四

(注) 安治川口は、大坂湾から淀川を遡上上洛する重要地点で、郡山藩が警衛担当であつた。

本件はその担当者交代の発令儀式で、家老の柳澤五郎右衛門が担当している。

3

三日 晴

一 竜花山江

井上甚五左衛門

御名代

④ 4御家老格四百石役料二百俵 辰六十五

明治二年民事局長

一 於折入三之間

御警衛御用ニ付

芦田福造

安治川口江 明曉方

三崎健蔵

出立ニ付罷出ル

今中禎之助

田中岩之助

植松順三郎

(注) 芦田④ 159御目付四十石役料二十俵 芦田福蔵 辰二十七

三崎④ 中17勘定衆三十五石 (支配方御目付) 辰二十

今中④ 262松之間席四十石役料五俵 今中禎三郎 (御広式番兼役) 辰四十一

田中④ 384大小姓席四十石 (支配方御城代) 寅三十五 \*慶応二寅年の任用

植松④ 中73御徒士並五両四人扶持 勤金等共 (銃隊取締) 辰三十六

何故か名前相違等で比定困難なものが多い。或いはこの時期改名者が多く出たのか。

右立會例之通

一 於御用部屋

御警衛御用ニ付

明曉方出立ニ付

御締向申談之

芦田福造

四日 晴

一 御用向無之

五日

晴

一 竜華山江

松平但見

御名代

一 於御用部屋詰合之面々

殿様被為召候ニ付、被遊

御年寄

當四日御京着、御同意

御用人

恐悦之御歛申上之

一 於折入三之間

警衛御用無滞

奥村常馬

相勤、安治川口方

山本 陳

昨夕帰着ニ付、罷出ル

門奈辰次郎

古谷文之助

古市鶴之助

立會例之通

木村房藏

(注) 齋藤は一日夕に帰着しているが、奥村等は四日夕に帰着したものか(2参照)。

奥村⑤ 158 御目付六十石 申三十四 \*「申」 万延元庚申年任用か

山本某は比定困難

門奈⑤ 343 大小姓組四十石四番組「門奈刀馬」か? 辰十九

古谷⑤ 309 御馬廻席四十石役料十俵「古谷太郎右衛門」か? 辰三十七

古市⑤ 349 大小姓組四十石役料十俵(銃隊組頭兼) 午十七 \*安政五年年の任用か

木村⑤ 376 大小姓席四十石(御広式番兼役) 子十八 \*元治元子年の任用か

5

一 於御用部屋

御警衛御用無滞

奥村常馬

相勤、昨夕安治川口方

帰着ニ付、御締向之

儀、申達之

右立會例之通

六日 雨

一 於御用部屋

殿様今般

被為召候ニ付

井上橘五郎

江戸表方當四日

御京着被遊候

依之竜華山

惣

6

御靈屋<sup>江</sup>御吹聴

御名代被仰付之

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通

(注) 保申が無事京着との先祖に対する報告(吹聴)を、井上に名代させたもの。

⑤ 51 御鍵奉行(格) 三人扶持 丑三十 \*慶応元丑年の任用か

同人が鎗奉行三人扶持となっているのは⑤ 4 家老格井上甚五郎の息部屋住出仕だろう。

一 於御用部屋

殿様益御機嫌克、被遊

御鍵奉行以上

御京着候ニ付、御歡申上之

其以下一席一人

(注) 四日に御年寄・御用人で同様の御歡を行っている。おそらく四日には重役衆に保申の急上洛理由等が詳しく説明されたのではないだろうか。

4

七日 晴

八日 晴

九日 晴

十日 晴

一 竜華山<sup>江</sup>

井上甚五左衛門

3 参照

御名代

十一日 晴

(注) この間にも京都の情勢は大きく動いているが、特段の動きは記されていない。

あるいは五郎右衛門等は保申と情勢分析・方針協議の為に上洛か。

7  
十二日 晴

一 於御用部屋

御徒目付

重山十蔵

被仰付之

⑦中6徒目付三十五石 亥三十 \*文久三亥年

支配方大目附・御目付

右之趣、五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

銃隊組頭兼

寺内友太

被仰付之

⑧288御馬廻組八十二石（銃隊組頭兼）辰三十

支配方銃隊奉行兼

\*分限帳はこの辞令を明確に反映している。

右同断

寺内友太

銃隊奉行兼

支配入

右同断不及披露

十三日 晴

一 真華院様<sub>江</sub>

松平但見

御名代

(注) 真華院殿慈芳妙淑大姉は元治元（1864）年十一月十三日逝去。

なお松平但見は、何故かこの後姿を見せない（後に郡山町長か）。

8

十四日 晴

一 於御用部屋

和州・河州

郡代

御領分御成箇

御勘定奉行

差出帳相下ル

右立會例之通

但、御入ヶ方御年寄<sub>茂</sub>罷出ル

(注) 御成箇(年貢)は概ね十一月中旬に順次決定、十二月十日が皆済期限とされていた。

十五日 雨

一 月並之御禮例之通

於御用部屋

御城代

方今

大寄合

将軍家御一大事之

寄合衆

御場合<sub>ニ</sub>付

寺社奉行

御直筆を以、被仰出候趣

御番頭

一同拝見致候様、被仰出之

御旗奉行

御鑓奉行

右之趣、五郎右衛門申渡之

(候力) \*以下、本文書筆者の「候・ル」は殆ど判読困難。

但席切罷出ル寄合衆方立會

御年寄

(注) この日は、十月二十四日慶喜の將軍職辞任を受けて、事態が急旋回している時期であり、急ぎ上京した保申が藩内世論統一のため、直筆を以て藩動向を告諭し、それを受けて階層別に、布達の間を設けたのではないだろうか。残念ながら内容は不明であるが、この反応を見て、保申は急遽十一月二十六日に御所及び幕府方に帰郡を願出たと思われる。なお、ここ迄が「銀馬代」身分で所謂重臣である（分限帳で「御城代」は確認出来ない）。

於同所

御奏者番

大目附

右同断

郡代

町奉行

右同断立會御年寄

但一同罷出ル

(注) ここで示されたのが「独礼」身分で、藩主に単独で拝謁できる重臣である。

一 大書院二三之間

右同断

御用達並方

御医師迄

右同断

(注) これらは「独礼」ではないが、重臣に準じる上士である。

一 松之間・檜之間

右同断

御納戸役方

大小性並迄

右同断

(注) これらが月並屋形出仕の「御目見」身分で、騎乗が許された。

これ以下は「席外」「小給人」と呼ばれる身分で、所謂「士分」の枠外である。

なお「檜之間」は部員提供の図面では確認出来ず、「郡山城百話」見取図にも見出せない。ここで極めて大胆な推論であるが、両図面で「鍵之間」と表示されている部屋が「松

之間」に隣接しているが、これは「檜之間」を「檜之間」と誤読或いは誤記したものであつたかも知れない。今後の検証課題としておきたい。

10

右同断

一 鍵之間

右同断

御徒目付方  
御徒士並迄

右同断

一 御次

右同断

御側向

右同断

一 御次御廊下

右同断

御次勤之面々

右同断

(注) 以上で、所謂全藩士(同心・中間を除く)を招集したことになり、極めて異例の措置

でこの告諭の重大さを示す。告諭内容が書かれていないのが残念だが、或いは削除か。

11

十六日 晴

一 於御用部屋

病氣ニ付願之通

高橋省庵

隠居

病氣名代

家督

神沢元道

三拾石 ②84 御医師並五十六石勤料五俵（本道）辰四十八  
被下之

御徒士被仰付之 高橋金弥

針醫 ②45 御徒士三十石（針医）卯十七 \*慶応三卯年

支配方奥御年寄御用人

右之趣、五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

②22 寄合衆六百石 寅十七 \*慶応二寅年

病身<sup>ニ</sup>付 青木早太郎

御番御免 病氣名代

被仰付之 曾雌守衛

但、年始御流 ②38 御番頭百二十石役料百三十俵（四番）巳三十四

御帰城・御発駕之節斗出仕、其外御用捨被仰付之

12

右同断、不及披露

（注）当時十八歳の若手重臣であり、文言から強制引退の可能性がありうる。以下にも多くの役替え事例等があり、佐幕派一掃の可能性があるかも知れない。

十七日 晴

一 竜華山<sup>江</sup> 山下八左衛門

御名代 ②51 御鍵奉行百五十石 辰四十一

一 於御用部屋

せかれ同苗 青山段之進

松太郎妻 ②27 寄合衆二百三十石 辰四十二

昨夜引取候

御礼申上之

右立會例之通

十八日 晴

一 於御用部屋

御土居廻り

候<sup>ニ</sup>付罷出ル

高野学馬

②154 御目付四十石役料五十俵 辰二十五

13

右立會御年寄

（注）御土居廻りは、城郭の濠・石垣・土塁を点検する重要な任務である。

十九日 晴

廿日 晴

一 竜華山<sup>江</sup> 井上甚五左衛門 3 参照

御名代

一 於御用部屋 （富？）

御警衛御用<sup>ニ</sup>付 富松岩蔵

安治川口<sup>江</sup>出張 ②116 寄合並四十石役料五十俵（銃隊奉行兼並勤方）

被仰付之 辰三十三

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通

寺内友太

館野八千蔵

14

平井源三郎

岡田作兵衛

吉村源内

土屋助左衛門

松本駒次郎

右同断

三宅友三郎

矢嶋傳次郎

野沢八千蔵

江馬市蔵

福田富美馬

次（須？） 藤貴久蔵

秋山鉄次郎

右同断

今泉孝五郎

（「次第」脱力）

但、支度 出立可致候

右同断

（注）寺内は7参照。館野以下は左之通

館野③ 365大小姓席四十石役料五俵（御広式番兼役）

巳二十五 \*安政四巳年任用

平井③ 368大小姓席四十石（支配方御城代）

未十七 \*安政六未年任用

岡田③ 394大小姓並三十五石役料十俵（支配方御目付）

辰三十八

吉村③ 365大小姓席四十石役料五俵（御広式番兼役）

巳十七

土屋③ 397大小姓並六十三石（支配方御城代）

辰四十九

松本③ 中7 相之間三十五石

酉十八 \*万延二酉年任用

三宅③ 中8 相之間三十五石勤料五俵（友太郎）

辰二十八

矢嶋③ 中34勘定衆並三十石勤料十俵（矢島奎左衛門？）

辰四十三 或いは

同 ③ 373大小姓席四十石（支配方郡代）矢島新次郎？戊十六

\*何れか判別不能

野沢③ 中7相之間三十五石勤料五俵（野沢周太夫？）

辰三十七

江馬③ 下17御国坊主 江馬為斎（次郎）？？？ \*比定困難

\*福田富美（貴カ）馬

比定困難

\*次（須？） 藤貴久蔵

比定困難

秋山③ 中36勘定衆並三十石

辰四十

今泉③ 357大小姓席四十石役料五俵（御厩目付兼役 耕五郎）辰二十七

\*この頃薩摩藩艦船四隻兵士三千が薩長土盟約のもと大坂に入港、他藩もこれに続く情勢があり、郡山藩も警衛兵力を増強したものか（十五日坂本竜馬暗殺さる。）

15

廿一日 曇

一 於御用部屋

大小姓並

後藤丹治

被仰付之 ③ 417大小姓並三十五石（御広式番兼役）戊十八 文久二戊年

御廣式番兼役

支配方御奥御用達御廣式御用役

右之趣五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

御徒目付

被仰付之

今澤猪之助

五石御加増都合 ③ 中7御徒目付三十五石（御代官役所御長住宅）辰二十六

三拾五石被成下

支配方大目附・御目付

但、御代官役所御長屋住宅

是迄之勤料五俵上ル

（注）家禄五石加増と勤料五俵の廃止は、五石の実収は概ね40%の二石であり、四斗（公



儀は三斗五升）俵の五俵と同じ価値となるので、この場合実収は変わらないが、家格に  
関しては石高が重視されるので、一応昇格となる。分限帳でも勤料五俵は上知表示。

16

右同断

病氣ニ付、願之通

（「富」以下同）

隠居

富川敬次郎

家督

病氣名代

七拾弍石

塚本順輔

被下之

せかれ

大小姓組被仰付之

富川寅蔵

細田半助組

右同断

富川寅蔵

月番

組入

御番頭

右同断不及披露

（注）塚本⑤ 341 大小姓組百八十石（一番）塚本条之進？ 辰六十一

富川⑤ 354 大小姓組七十二石（五番組）

卯十七 \*慶応三卯年 家督繼承

細田⑤ 36 御番頭百五十石役料百俵（五番）

辰四十七

廿二日 晴

一 於御用部屋

御警衛御用ニ付

安養寺二郎

安治川口江出張

⑤ 281 御長柄頭九十一石 丑三十九 \*慶応元丑年

被仰付之

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通  
右同断  
平嶋主馬太郎  
山田彦内  
中寫多橋

17

右同断

（注）⑤ 301 御馬廻席四十石（御広式番兼役）

辰二十二

⑤ 268 松之間席四十石役料十俵（御金藏勤番）辰四十二

中嶋（中島） 比定困難

廿三日 晴

一 於御用部屋

来ル廿七日春日

西窪蔵太郎

祭礼御用、先格

⑤ 35 御番頭百二十石役料百三十俵（六番）辰四十八

之通申合候旨

武藤丹左衛門

申達之

⑤ 44 御鎗奉行百五十石 辰五十九

五郎右衛門及挨拶

蔵太郎儀、先格之通

申合候様申渡之

右立會例之通

18

右同断申達之

五郎右衛門及挨拶

桃井勇記

末々迄作法宜

⑤ 65 大目附九十五石役料三十五俵 辰五十四

申付候様、申渡之  
右立會御年寄

(「飯」カ)

右同断

阪塚奎太夫

申達之

山本頼母

五郎右衛門

廣藤京馬

及挨拶

大谷宅右衛門

川村織江

宮沢直記

鹿貫竹三郎

村田徳之丞

池上左門太郎

右立會例之通

(注) 飯塚⑧ 85御弓鉄砲頭百石分役料百俵 (明治二年銃士隊長) 辰二十八

山本⑧ 87同 百十石役料九十俵 辰二十二

廣藤⑧ 86同 百五十石役料五十俵 辰二十三

大谷⑧ 128御使番百十石 丑三十 \*慶応元丑年

川村⑧ 145御目付四十石役料五十俵 (明治二年刑法局輔長) 辰二十二

宮沢⑧ 278御長柄頭八十二石 丑三十九

鹿貫⑧ 279同 四十石勤料五俵・役料十五俵 辰三十五

村田⑧ 291馬廻組百五十石 (五番) 寅十九

池上⑧ 352大小姓組百六十石 (一番) 寅二十

19

別段罷出ル

末々迄作法宜

川村織江

申付候様  
五郎右衛門申渡之  
右同断

(注) 川村はこの行事目付として、特段の申付が有ったのか。

何れにしてもこの重大時期、春日御祭にこのような大仰な布陣は何だろう。

廿四日 曇

一 於御用部屋

浅川又内

橋本猪野右衛門

支配所村々

澤井半之助

免定御判

竹田忠治

申合之

新藤盛之助

立會衛守与十郎 大目附

(注) 十四日の差出帳承認により、免定状交付が決定された。

浅川⑧ 253松之間席四十二石役料五十俵 (和州・河州御代官兼役) 辰四十五

橋本⑧ 70郡代五十五石役料六十五俵 辰五十八

澤井⑧ 176勘定奉行四十石役料三十俵 辰四十一

竹田⑧ 307馬廻席四十石役料十俵 (勘定衆組頭・土砂方并道奉行兼役) 辰四十五

新藤⑧ 368大小姓席四十石 (御用金方役所附) 斧辰右衛門? 辰三十六

衛守与十郎については比定困難だが20・21にも立会大目附として登場する。

或いは⑧ 17御年寄並十人扶持 (部屋住) 松平与十郎の家督継承までの通称か。

また⑧ 15御年寄並四百二十石大井衛守 辰四十三、⑧ 38御番頭百二十石役料

百三十俵會雌守衛巳三十四があり、この可能性もある。

廿五日 晴  
一 於御用部屋

御朱印御長持  
御封印相改相済  
候ニ付罷出ル  
三間類八  
丸山 亘  
兼松半三  
三好庫三郎

右立會御年寄

(注) 三間⑤ 67大目附九十石役料四十俵 (文学武芸御用掛) 辰三十五  
丸山⑤ 162御目付四十石役料五十俵 辰三十七  
兼松⑤ 188書院詰六十石 辰五十七  
\*三好庫三郎 比定困難

御朱印長持封印改とは、藩存立の基礎である公儀朱印状等を収納封印した長持を開封確認することであろう。

江州両手  
御領分當卯年 郡代  
御成箇差出帳 御勘定奉行  
相下之  
右立會例之通  
但、御入ヶ方衛守罷出ル 衛守は19 (注) 参照

(注) 江州両手とは郡山藩江州領の海津代官と金堂 (近江八幡) 代官所の両所のこと。  
和州・河州は東・中・西の三手からなり、十四日に行われている (8参照)。

福地文助 和田忠兵衛

支配所村々 志村藤七  
免定御判 伊川十兵衛  
申合之 久保村 巖

立會衛守与十郎 大目附

(注) 浅川代官支配については、二十四日に行われている (19参照)。なお郡代は橋本との両役制になっている。

福地⑤ 301馬廻席四十五石役料五十俵 (和州・河州御代官兼役) 辰四十一  
和田⑤ 69郡代六十石役料六十五俵 (御用金引受) 辰五十二  
志村⑤ 178御勘定奉行九十七石役料五俵 未三十九 \*安政六末年  
伊川⑤ 250松之間席六十八石役料五俵 (勘定衆組頭・土砂方并道奉行兼役) 辰三十四  
久保村⑤ 301馬廻席四十五石役料十俵 (勘定衆組頭兼役) 友藏? 辰四十二

21

廿六日 晴

一 於御用部屋  
御警衛御用ニ付 丸山 亘 20参照  
安治川口江出張  
被仰付之

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通

小林良太郎 橋本猪野右衛門 19参照  
支配所村々 中村良作  
免定御判 佐藤太助  
申合之 森山幾藏

立會衛守与十郎 大目附

(注) 浅川・福地に続く小林代官支配である。以上で和州・河州三手が完了となる。

小林③ 313馬廻席六十石役料五十俵 (和州・河州御代官兼役) 申三十八\*万延元申年

中村④ 165郡代格四十五石役料二十五俵 (御勘定奉行勤・御用金方引受 辰五十五

佐藤⑤ 251松間席四十五石役料五俵 (勘定衆組頭兼役) 辰三十九

森山⑥ 326馬廻席四十石(支配方郡代) 辰二十六

廿七日 晴

22

一 今暮六半時過、京都表方御用状相達

左ニ

伝奏江御伺書

ママ

私儀急御用ニ付、從江戸表方不取敢上京仕候

處、此節柄之儀ニ付、家事取締向等茂、申

付度候間、一先帰邑仕度奉願候、尤重臣

之者差置候間、御用之節者御達次第

近場之儀ニ付、一昼夜ニ而乗切、速ニ上京

可仕候、此段奉伺候 以上

十一月廿五日 御名

御附紙左之通

願之趣、無據次第候間、家事取締置

猶亦上京可有之事

23

一 御老中板倉伊賀守様江御伺書、左之通

私儀急御用ニ付、不取敢上京仕候處、差向

被仰出之品茂無御座候者、此節柄之儀ニ付、

家事取締向等茂申付度候間、重臣之

者差置、一先帰邑仕度、尤御用之節者

近場之儀ニ茂御座候間、御沙汰次第

早速上京可仕候、此段奉伺候 以上

十一月廿五日 御名

御附紙

可為伺之通候

右ニ付、明廿八日御提灯引、京都表

御発途、長池宿御昼被為召上、直様

御帰城可被遊旨、被仰出之

(注) 京都郡山藩邸(二条城北)から郡山城迄は、現在のナビ計測で約五十キロ、廿八日早

曉に提灯付で出立し、同日四半時(夜十一時)帰城という恐るべき急行程である。一刻

も早く帰城したいという状況が察せられる。なお「保申家記」では当初この部分は記さ

れていなかったが、後に追加されているところでは、これ等の伺書は両通共紛失と報告

している。或いは「差向被仰出之品茂無御座候者」の部分に問題があったのだろうか。

廿八日 晴

一 於御用部屋

24

昨廿七日祭礼御用

無滞相勤候ニ付罷出ル

神前之掛物狸耆疋

被下置候旨、五郎右衛門

申渡之、蔵太郎

儀者居残り、御番所向

西窪蔵太郎

武藤丹左衛門 両者共に17参照

先格之通相勤候段  
申達之  
右立會例之通

雉子 二

大目附

兎 一

御物頭

被下之

御使番

雉子 一

御目付

右同断

御長柄頭

右同断

添騎馬

右一同罷出、右同断神前懸物被下置候旨、五郎右衛門申渡之

25

右立會御年寄

但、書付出ル

昨廿七日祭礼御人数

無滞引取候段、申達之

桃井勇記

18参照

小弥太居残り御番所向

丹羽小弥太

前後御届向無滞相済

川村織江

18参照

候段、申達之

右立會右同断

(注) 丹羽④ 147 御目付六十石役料六十俵 (南都御用掛)

辰二十六

祭禮ニ付御馬

御馬御用懸り

手入等行届、太儀

高野学馬

12参照

之旨五郎右衛門及挨拶  
立會御年寄・大目附

奥村常馬  
4参照

一 於大書院三之間

祭礼御用無滞

御醫師方

相勤候段申達之

御役人迄

五郎右衛門及挨拶

26

右立會例之通

(注) 定例行事とはいえ、藩主が急行程で帰郡の一方で、城内では御祭りの掛物の分配など

を行っていることに、違和感を感じざるを得ない。

この頃に長州勢二千が摂津打出に上陸、京に向って進軍を開始していた。

一 於御用部屋

御帰城ニ付、今朝

益田金作

町廻り候ニ付

④ 73 町奉行九十石役料六十俵 辰四十三

罷出ル

右立會例之通

一 殿様益御機嫌克、今晚四半時打式分

御帰城被遊候、万端左之通

一 於御用部屋

御城着被遊候ニ付

竜華山惣

松本矢柄

御霊屋<sup>江</sup>

④ 41 御旗奉行百五十石役料二十俵 辰四十六

御吹聴

御名代被仰付之

右立會例之通

御名代帰り<sub>ニ</sub>付  
罷出ル

右同人

27

右同断

御帰城御歛

御鍵奉行以上

申上之

席切

但、寄合衆以下、立會御年寄

御供無滞

板垣正左衛門

相勤、只今

池谷左軍治

帰着<sub>ニ</sub>付罷出ル

右立會例之通

(明治二年軍務局副長)

(注) 板垣<sub>分</sub>11御年寄並二百廿石役料八十俵 (文学武芸并御武具御用掛) 辰三十七

池谷<sub>分</sub>17同 百五十石役料百五十俵 (御入ヶ方奥) 辰四十三

\*この二名等は、おそらく京都駐在であり、保申と共に帰郡したものか。

右同断

船田修藏 (明治二年会計副長)

右同断

<sub>分</sub>76御用達並九十七石役料五俵 (御供方御刀番兼) 辰三十六

但御供御用人<sub>茂</sub>罷出ル

右同断

杉山左五兵衛

28

<sub>分</sub>142御目付五十八石役料三十七俵 (宗門改御用掛) 辰三十九

高瀧小藤治

<sub>分</sub>143同 四十石役料五十俵 (宗門改御用掛) 辰三十七

右同断

但、右同断

御帰城<sub>ニ</sub>付

大橋内<sub>江</sub>罷出

樋口新八

御言葉被成下

<sub>分</sub>74町奉行百十石役料四十俵 戊三十五 \*文久二戌年

御禮申聞之

右同断

御帰城<sub>ニ</sub>付

火之元念入

大目附

候様、申渡之

御目付

右立會御年寄

廿九日 晴

一 明晦日、龍華山<sub>江</sub>

御参詣御供揃、朝四ツ時被仰出之

29

晦日 晴

一 朝四ツ時御供揃<sub>ニ而</sub>

御参詣被遊候御出掛

一 折入三之間

御警衛御用<sup>ニ</sup>付

安治川口<sup>江</sup>明曉

出立<sup>ニ</sup>付

御警衛

出張之面々

御目見被仰付之

御意被成下

御立合五郎右衛門

(注) この安治川口出立の面々は、誰々か良く分からない。或いは保申直々の方針を伝える  
為に急遽編成したものか。

30

一 龍華山<sup>江</sup>

中澤小一兵衛

御名代

④ 49 御鑑奉行百石役料五十俵 辰六十九

一 月仕舞<sup>ニ</sup>付、両御目附

御前<sup>江</sup>被召出候、御用向申上之

(注) この後、十二月と翌慶応四年一月の記事が欠落している。この間に王政復古から慶喜  
の都落ち、大坂湾海戦・鳥羽伏見での幕府軍敗走、慶喜の逃亡等々郡山藩にとつても危急  
存亡の時期を迎えるが、残念ながらその記録は削除して書換えたものと思われる。

(削除期間)

31

二月朔日

一 月並御礼例之通

二日

一 竜華山<sup>江</sup>

樋口與兵衛

御名代

⑤ 3 御家老格四百石役料二百俵 辰五十一

(注) 「幕末庄屋記録(元治二年出府日記)」では「御年寄」として同行出府、「同(慶応三  
年諸色留帳)」には二月二十三日「家老被仰付候」とある。

一 於御用部屋

岩手武次郎

屋敷

印藤別書

御引替被下之

右之趣五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

印藤別書

屋敷

丹羽與大夫

御引替被下之

右同断

32

丹羽与大夫

屋敷

岩手武次郎

御引替被下之

右同断

(注) 印藤③33 寺社奉行百三十石役料百七十俵 辰四十九 (明治二年刑法副長)

丹羽④48 御鑓奉行三百五十石 辰二十一

岩手⑤246 松間詰二百二十石 (六番組) 卯十七

岩手・印藤・丹羽の屋敷交換であるが、岩手は松之間詰二百二十石 (六番組) 卯十七という若年で、松之間詰 (通常四十石程度) としては異例な石高であり、江戸詰大目附 (御用人) 「岩手孫右衛門」の跡目と思われる。

おそらく重臣跡目として慶応三年七月に帰郡したが、若年のため無役に近く、暫定的に屋敷を拝領したものの、不釣合いとなり是正三角トレードを行ったと思われる。

## 一 於御年寄詰所

支配頭<sup>江</sup>

束髪

青柳辰斎

申付之

(渡)

郷藤喜斎

星野徳斎

右之趣平太申渡之

(注) 青柳⑥下15 御国坊主四両二人扶持 辰十七

郷渡⑦下16 同 三両二人扶持 未十三

星野⑧下17 同 三両二人扶持 戌十三

平太⑨16 御年寄並百五十石役料八十俵 (五番組 曾禰平太?) 辰二十五

この少し前、一月二十八日に保申は二カ月ぶりに上京し、二月一日に参内して天皇の元服祝いの品を献上品しているが、残念ながら、ここには全く記録がない。

三日

## 一 竜華山<sup>江</sup>

御名代

井上甚五左衛門 3 参照

33

四日

## 一 於御用部屋

大津御蔵納拂

山下貫左衛門

御用無滞相勤

⑩173 御勘定奉行五十石役料二十俵 辰四十六

今曉引取ニ付罷出ル

但、立會例之通

(注) 郡山藩では北近江領 (海津・金堂両手) の年貢米は、大津蔵屋敷に収納し、相場により売り捌くこととしていた (当然各村の郷蔵にも一時保管)。これはその一連の業務完了を意味する。

了を意味する。

## 一 初午ニ付

麒麟曲輪稲荷明神<sup>江</sup>、寶山寺比丘

罷越、立會上下御目付田中雲八

⑪150 御目付四十石役料五十俵 (文学武芸御用掛) 辰三十五

(注) 初午は二月最初の午の日で、稲荷神社の大祭が行われる。郡山城麒麟曲輪には稲荷社 (密かに綱吉の霊屋があったとも) があり歴代信仰されていた。生駒山寶山寺の中興堪海律師 (一色氏) は郡山藩主吉里との関係があり、以来縁を保って祈願等を行っている。

五日

## 一 竜花山<sup>江</sup>

御名代

井上甚五左衛門 3 参照



一 同列與兵衛、今明日在宿

34

六日

一 於御用部屋

書役兼

清水楨之助

被仰付之

③ 379 大小姓席四十石（支配方郡代） 丑二十五

支配方は迄之通

右之趣、五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

七日

一 於御用部屋

四拾石被下之

亡父亥三郎跡式

大小姓組

廣瀬両平

被仰付之

安達三郎兵衛組

（明治二年銃士隊長）

35

③ 37 御番頭百石役料百五十俵（一番） 辰三十七

右之趣、五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

廣瀬両平

月番

組入

御番頭

右同断不及披露

（注）廣瀬③ 285 御納戸役四十石役料五俵（御武具方兼四番組 亥三郎） 辰三十四

分限帳には亡父亥三郎（四十五歳）が記されており、追補がこの辺りまでと分かる。

迹目の両平は御納戸役には就かず、単なる大小姓組であるため役料はないが、家禄は保証され安達組番方に編入されたもの。

36

（注）二月十一日に政府から各藩貢士の派遣の命があり、郡山藩も中藩として次の二名の派遣を行っているが、ここには何の記事もない。

安元彦助 分52 御鑓奉行百三十石役料九十俵（銃隊奉行兼） 辰二十五

山村治左衛門 39 十六日記事参照、

十四日

（「於」「御」カ）

一 □出張御用部屋

（親）

御新征供奉御願ニ付

至善被為蒙

仰候ハ、御供被仰付候内意申談之

板垣正左衛門 27 参照

藤波牧太

曾祢平太

（注）藤波③ 14 年寄並二百石役料百俵（文学武芸御用掛、御武具御用掛） 辰四十一

（新政府公儀人）

曾祢③ 16 年寄並百五十石役料八十俵（五番組） 辰二十五\*重複記載

「家記」二月九日条で、御親征に関し厳重警護準備のため帰郡願がなされている。

さらに三月朔日に親征警護のため出坂を願出ている。

37

十五日

一 式日御禮例之通

一 南都御用懸り丹羽小弥太申出候左<sup>三</sup> 25 参照

久我大納言様、諸大夫春日讃岐守

申聞候<sup>三</sup>ハ、以来無宿者手懸り無之向ハ

御手切之御取斗<sup>三</sup>而宜敷旨申聞之、併

手懸有之候ハ、精々御手抜なく御取調専

用被成候よう内問合申聞之

(注) 春日讃岐守は久我家諸大夫の志士で、安政大獄で永押込に処せられる。久我通久の  
和鎮撫総督就任とともに参謀となり、さらに初代奈良県知事となった。  
なお「専用被成候よし」とすべきか。

十六日

一 今五ツ時、春日讃岐守殿を以、被申通候左<sup>三</sup>

小俣伊勢守

并<sup>ニ</sup>妻子式人

若黨式人

女 式人

38

右之通、関東事定り候迄、柳澤甲斐守

家来<sup>江</sup>御預ケ被成候事

二月十六日

(注) 当代(最後の)奈良奉行及びその家族等の保護預かりを命じられたものである。  
なお、松平賜姓を廃するよう命じられたのは、正月十六日(「家記」10参照)とされ  
ているが、それを受けて「柳澤甲斐守」が定着していたことが分かる。なお藩主ではな  
く「家来<sup>江</sup>御預」となっているのも興味深い。

一 於御用部屋

病氣<sup>ニ</sup>付

願之通

御役御免

⑤ 10年寄並二百四十石役料六十俵(奥文学武芸・御武具御用掛)

寄合衆

病氣名代

被仰付之

池谷左軍治 27 参照

但、是迄之御役料六拾俵上ル

右之趣五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

(注) 内田は明治二年郡山藩新職制では、執政平岡の下で安元と共に参政職を務めており、  
これが単なる病氣御役御免か極めて疑わしい。

39

病氣<sup>ニ</sup>付

願之通

茂木亭左衛門

御役御免

病氣名代

寄合衆被仰付之

藤波牧太 36 参照

但、是迄之御役料百五拾俵上ル

(明治二年内務局家知事)

(注) 茂木⑤ 13御年寄並百五十石役料百五十俵(御馬等御用掛) 辰四十四

茂木も公儀人であり、新職制で要職を務めていることから同様の疑問がある。

右同断

病氣<sup>ニ</sup>付

願之通 藤川友作

文学督学兼 病氣名代

御免被仰付之 山村治左衛門

(注) 藤川⑤ 22寄合衆二百石 (文学督学兼) 辰六十一

山村⑤ 205御書院詰四十石役料三十五俵 (儒者見習、御年録方兼、御系譜御用掛)

辰四十三

山村は貢士指名 36 (注) 参照

当時の藤川は七十二の高齡であり、とても時勢の変化についていけなかっただろう。

右同断

病氣ニ付

願之通御役 福貴 硯

御免被仰付之 病氣名代

勘定所勤 園崎實馬

支配方郡代

(注) 福貴⑤ 368大小姓席四十石 (御徒目付兼役) 申二十七

\* 「徒目付兼」 罷免で勘定所勤となっている。

園崎⑤ 377大小姓席四十石 (御徒目付兼役) 辰三十二

40

右同断

病氣ニ付

願之通 山本謙吾

出役御免 病氣名代

被仰付之 馬場駒次郎

勘定所勤

支配方は辻之通

(注) 山本⑤ 375大小姓席四十石役料五俵 (目安方兼役) 子二十三

\* 「目安方兼」 罷免で勘定所勤となっている (支配方は郡代で変わらず)。

馬場⑤ 324馬廻席四十五石 (支配方御城代) 辰十七

右同断

古役 寄合衆

引合 内田収助 38参照

茂木亭左衛門 39参照

右同断不及披露

(注) この発令は引継ぎに関するものか意味不明。 38・39参照。

十七日

一 折入之間

御着座

41

大目附 吉田 一 (明治二年民事局副長)

被仰付之 ⑤ 95弓鉄砲頭百五十七石役料四十三俵 辰三十八

右之趣 御直々被仰付之、披露御奏者番

御取合五郎右衛門、侍座例之通

(注) 藩主直々の発令であり、或いは特命 (藩内綱紀肅清か) があったのか。

御廣式御用役 長谷川勇之進

被仰付之 ②278長柄頭四十石勤料五俵役料十五俵 辰三十八

是迄之御役料・勤料共其俵被下之

右同断

一 於御用部屋

御金蔵

御役人

被仰付之

④中8相之間三十五（支配方御金奉行） 亥十八

支配方は迄之通

42

右之趣五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

古役

大目附

引合

吉田 一

右同断不及披露

誓詞

吉田 一

同

長谷川勇之進

右如例

十八日

一 於御用部屋

目安方兼役

中山兎毛馬

被仰付之

③382大小姓席四十五石（支配方郡代） 寅三十

支配方は迄之通

右之趣、五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

43

一

樋口與兵衛方願、井上甚五左衛門差出之  
私せかれ同姓文右衛門儀、此度吉松竜庵  
取持を以、千葉七郎右衛門娘後妻へ縁組  
仕度旨差出之、即日御聞濟ニ付

（「屋」脱力）

元御用部 三而 申談之

（注）樋口 31（御家老格）参照

井上 3 （御家老格）参照

樋口文右衛門④49御鍵奉行格（部屋住無記入） 卯二十三

吉松④209御書院詰四十石勤料十俵（本道、奥） 辰三十五

千葉④21寄合衆二百三十石 辰四十

十九日

折入之間

御着座

御用人並

被仰付之

土肥老之丞（明治二年内務局参知事）

是迄之御役料之内

拾俵高結都合百石

被成下、残ル御役料ニ

四拾俵御増、都合七拾俵

被下之

（注）土肥は、分限帳では次の通り記されており、此の発令は分限帳には反映されていない

と思われる（つまり現存分限帳は、二月中旬頃に記録を終えていることが確認される）。

慶応元年四月二十一日

66一、九十石（七十八石） 土肥老之丞 辰三十

御役料四十俵（十二俵）

このことから、発令前の九十石が百石になったが、これは役料四十俵から十俵を振替（高十石は実取高四石、四斗俵十俵も四石で同価値だが家格として昇格する）たものであり、役料残高三十俵に四十俵の加増で七十俵になったことを示す。実収では百三十石から百七十石に加増されたことになる。つまり慶応元年に七十八石十二俵（実収九十石）から九十石四十俵（実収百三十石）、今回実収百七十石と大幅な加増になる。藩財政逼迫の折柄一体何があったのか。

44

右之趣

御直々被仰付之、披露御奏者番御取合

五郎右衛門、侍座例之通

一 於御用部屋

御警衛御用<sup>ニ</sup>付

服部勇左衛門

出京

⑤ 189御書院詰四十石役料二十俵 辰四十二

被仰付之

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通

（注）保申は、十七日に親征供奉を命じられ（「家記」37参照）、十八日上京しているが、これらについて何故か殆ど関連記事がない。服部上京はこのための増強策か。

廿日

一 竜華山<sup>江</sup>

御名代

廿一日

45

廿二日

一 於御用部屋

益田金作<sup>26</sup>参照

樋口新八<sup>28</sup>参照 明治二年参事

其方儀去卯九月、無宿栄蔵・由松御目付両手申合、取調可申處、御目付一手<sup>ニ而</sup>為取調候段、不束至極候、依之急度も可被仰付候處、此度京都表方大赦被仰出候<sup>ニ</sup>付、御沙汰不被及候段被仰出之

右之趣、五郎右衛門申渡之、立會例之通

小澤角兵衛

⑤ 102御弓鉄砲頭百石役料百俵 辰二十八

46

其方儀先役中、去卯九月無宿栄蔵・由松町奉行両手申合、取調可申處、其方一手<sup>ニ而</sup>取調候段、不束至極<sup>ニ</sup>候、依之急度も可被仰付候處、此度京都表方大赦被仰出候<sup>ニ</sup>付、御沙汰不被及候段、被仰出之

右同断

（注）無宿人の取調を一手のみで行ったのは、不束至極として、町奉行・目付を処分すべきところを大赦令により免除したものであるが、通常無宿人取調は、町方同心・代官手代の所管であり、如何にも大仰である。或いは密偵・隠密の疑いがある無宿人を見逃したのではないか。なお小澤は慶応三年十月六日付けで弓鉄砲頭に転任しているので、事件

發生の九月には町奉行だったのだろう。また維新の大赦令は正式には三月発令であり  
〔家記〕 39 参照)、これは明治天皇元服にともなう正月十五日大赦令か。

廿三日

一 於御用部屋

是迄之御役料之内

五俵高結

都合五拾石

被成下

④ 365 大小姓席五十石 (御徒目付兼役) 巳三十五

太田荒五郎

御徒目付兼役

御免被仰付之

勘定所勤

支配方郡代

但、是迄之御役料拾俵上ル

47

右之趣五郎右衛門申渡之、披露立會例之通

(注) この場合は、従来四拾五石、役料十俵のところ兼務解消により役料は廃止され、五俵のみが高振替えられて五十石となったもの。実収入は五十五石から五十石に減額になる。但し分限帳では「御徒目付兼役」で五十石役料無 となっている。

病氣ニ付

願之通

森 五十郎

出役

病氣名代

御免被仰付之

⑦ 345 大小姓組四十石役料十俵 (銃隊組頭兼) 辰三十六

席是迄之通

\*又十郎?

安達三郎兵衛組

但、是迄御役料拾俵上ル

右同断

廿四日

一 於御年寄詰所

支配頭江

坊主格

申付之

御武具同心

御武具師兼

山本長之助

勤料老人扶持被下之

支配方は迄之通

(注) 山本金之助④ 下2小給人三両一人扶持、勤金一両勤料一人扶持

とも思われるが、かなり不一致で、その他に山本姓多く比定困難。

或いは扶持米被下者四人扶持の山本勝之助か。

48

右ハ平日御奉公向貞実ニ相勤、其上近年格段御用増之处、出精相勤右御用多中御取込、承手業を以御奥向之御用度々被仰付候处、無料ニ而相納候段、小給之身分奇特至極ニ候、依之格外之訳を以、右之通申付之

右之趣、平太申渡之、立會大目附

平太32 参照

廿五日

一 於御用部屋

御朱印御長持

大目附

御封印相改候<sup>ニ</sup>付

罷出ル

右立會御年寄

其余  
例之通

(注) 20 参照。

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日

晦日

一 於御用部屋

来月之月番届例之通

(完)